

共通論題「マレーシア都市の諸相」について

多和田裕司(大阪市立大学)

第18回(2009年度)日本マレーシア研究会(JAMS)研究大会は、2009年12月12日(土)、13日(日)の両日、大阪市立大学学術情報総合センターにおいて開催された。二日間で延べ60名ほどの方のご参加を頂き、各セッションで興味深い発表、議論が交わされた。主催校の責任者として、お越し下さった皆様にあらためて感謝の意を述べさせて頂きたい。

本稿では、筆者がコーディネーターを務めた(共通論題)「マレーシア都市の諸相:多民族空間の過去、現在、未来」(13日午後)のセッションについて報告する。

主催校としての共通論題を設定するにあたって、都市をテーマに選んだのは次のような理由による。第一に、マレーシアの特徴である多民族・多文化性は都市においてもっとも強く発現してきたことが挙げられる。マレーシアの多様性は、交易、植民地化と植民地政策、近年のグローバリゼーション等に代表される外的な要因と、各地域に根ざした内的な要因との相互作用によってもたらされた。このような相互作用の場となり、かつそれによって形作られてきたのがマレーシアの諸都市にほかならない。第二に、現代マレーシアにとっての都市の重要性である。マレーシアではすでに都市居住者とされる人々が人口の過半数を超え、都市部を中心にこれまでにない新たな文化や生活様式が形成されつつある。その一方で、やはりこれまでとは異なるような社会問題やアイデンティティの模索といった現象も都市において顕著である。したがって、現在ならびにこれからのマレーシア研究においては、現実理解と問題設定の双方において、都市への着目がま

すまず必要とされるはずである。第三の理由は、都市の重要性と都市へ着目することの必要性にもかかわらず、従来のマレーシア研究において都市があまり取り上げられてはこなかったことである。都市は政治や宗教、民族問題等のテーマを論じるさいの意識されざる背景として存在するのみであり、都市そのものや都市に生きる人々を積極的に対象とする研究は、他の研究テーマに比べて必ずしも十分には追求されてこなかった。

このような問題意識に立って、本セッションでは、これまで主に都市研究の立場から研究を進めてこられた方々に報告をお願いした。報告者は報告順に、泉田英雄会員(豊橋技術科学大学)、宇高雄志氏(兵庫県立大学)、藤巻正己氏(立命館大学)であり、穴沢真会員(小樽商科大学)、祖田亮次会員(大阪市立大学)がコメンテーターとしてくわわった。司会は多和田(大阪市立大学)が担当した。なお、宇高、藤巻の両氏はJAMS会員ではないが、マレーシア都市研究の第一人者ということで、ご多忙のなか無理をお願いしてご参加頂いた。

泉田英雄会員による報告「マレーシアの地方都市史研究:華人新村を中心に」では、従来共産主義者対策のための強制移住という文脈でのみ議論されてきた華人新村を、都市計画という観点からとらえ直そうとする試みがなされた。1950年代はじめ、Harold Briggsによって着手されたいわゆる Briggs Plan は、英領マラヤでおおよそ76万人(人口の12.2%)の、主として華人を新村へと移住させた。泉田報告では、Briggs Planの特徴、資金の出所と用途、事業実施過程が丹念に紹介されるとともに、その居住地デザインや

事業計画の分析から、新村建設は物理的環境の整備だけではなく、コミュニティ形成を意図するものであったことが指摘された。華人新村は、都市計画論的にみた場合、教育、店舗、社会施設等を備え、住宅地の区画や街路配置には公衆衛生・防災思想が反映された居住地であり、周囲に鉄条網がなければごく普通の郊外住宅地だったのである。これは当時のイギリスの New Town 思想と同一のものであり、ガーデン・シティの自給的な側面を強く残した住宅地形成でもあった。その後各地の華人新村は、マレー人新村や混在新村とともに、マレーシアの地方都市へと発展していくことになった。

次に宇高雄志氏の報告「世界文化遺産を守ること:あるモスクの保全と開発をめぐる」では、文化保全という試みから逆照射されるマレーシアの文化的特徴が、世界文化遺産登録という背景のなかで論じられた。1990年代にはいると観光開発の期待を背景にしつつ、マレーシアでも文化保全への意識が高まってきた。ペナンやマラッカの世界文化遺産登録もこの流れのなかで出てきたものである。しかし、世界文化遺産として指定されるためには、当該文化遺産のオーセンシティ(真実性)とインテグリティ(完全性)が求められる。この基準に照らしたとき、ペナンにしるマラッカにしる、中心市街地の建築や街並みがマレーシアの遺産として位置づけられるのか否かという問題を抱えていた。多民族社会マレーシアでは「我々」を確認できる対象を見いだすことが困難であり、文化保全をめぐる複雑な状況が存在する。たとえばペナンのアチェ・モスクにおける宗教局提案の住宅計画では、中心市街地の活性化かあるいはマレーの伝統の保存かが相争われた。このような状況のなかでペナンとマラッカが世

界文化遺産に登録されたのは、その文化的多様性や様々な時代の建築物がおなじ地域にあるといったユニークさが評価されてのことであり、このことは世界文化遺産にたいする考え方の変化を表すものであるかもしれないと論じられた。

藤巻正己氏の「クアラルンプールの心象地理:スコッター都市、マハティールの都市、トランスナショナル都市」と題された報告は、クアラルンプールの過去30年の変遷を、ランドスケープおよびエスノスケープに焦点をあてながら跡づけるものであった。1980年代のクアラルンプールでは、マレー人比率の増大とともに従来の華人都市から多民族都市への変容を経験しつつある一方で、依然として数多くのスコッター地区を抱えていた。しかし、1990年頃から進展したマハティールによる各種メガプロジェクトは都市の様相を一変させ、クアラルンプールにムナラ都市化をもたらし、それにつれてスコッターに対する一般の評価も同情から反発・否定へと大きく変化した。まさにマハティールの都市の誕生である。さらに2000年代に入ると、グローバル化のなかでツーリストや外国人労働者が急増し、クアラルンプールはトランスナショナルな様相を帯びるようになる。ツーリズム空間の拡大、スコッターの高層フラットへの再定住化等によって生み出された現在のランドスケープは、スペクタクル都市と呼ぶに相応しい様相を呈している。

以上三篇の報告にたいして、穴澤眞会員からは、華人系新村とマレー系新村との違い、華人が新村に居続けた理由、おなじ世界文化遺産であるマラッカとペナンの方向性の違いの有無、クアラルンプール再開発における Urban Development Authority の役割等についての質問があった。祖田亮次会員からは、ボルネオ

を主たるフィールドとする立場から、ボルネオの新村の状況、自然遺産の位置づけ、クアラルンプールでマレーシアを代表させることの可否などについてのコメントが寄せられた。

以上の報告ならびにコメントとその応答を聴講しながら、マレーシア研究という観点からの筆者の感想をいくつか記しておきたい。

第一に、本セッションを通して、マレーシア研究において都市に着目する重要性があらためて確認できたのではないかと思われる。三氏の報告それぞれからうかがえるように、これまでのマレーシア研究において主要なテーマとして論じられてきたものを、都市はまさに「目に見える形で」我々に示している。今回の報告に即していえば、国家形成期における英国の影響、文化をめぐる民族間の複雑な関係、経済発展にともなう社会階層の再編過程などが、都市景観という形で留められているのである。そうであるならば、逆に都市に焦点をあてることで、マレーシアの社会的、文化的特色を浮かび上がらせることができるはずである。

第二に、マレーシアという社会を突き動かす動因となっている文化的多様性やそれぞれの要素のヘゲモニー争いが、近年一層複雑化していることが感じられた。具体的には、開発と歴史保存の間でモスクの文化的、歴史的意味についての論争が生じた事例(宇高報告)や、外国人観光客や労働者の流入がアラブ・ストリートなどとして都市再開発に利用される事例(藤巻報告)のなかに、「マレー」「中国」「インド」「イスラーム」「西洋」等々の、マレーシアを構成する文化要素が、グローバル化というあらたな種類の「外部」との相関を通して、たがいの関係を複雑に変化させているありようを見ることができる。しかも、グローバ

ルなものとの出会いは都市においてこそ顕著にあらわれることから、この点においても都市を対象とすることの重要性が浮かび上がる。

第三に、本セッションでの報告を聴きながら、マレーシア研究における分野横断的な議論の意義を感じることができたことも付け加えておきたい。いうまでもなくマレーシア研究のような地域研究においては、ひとりの研究者ではカバーすることのできない広大な分野・領域が存在する。今回都市をテーマとする主催校セッションを計画したことで、これまで(ご研究については存じていたが)ほとんど面識のなかった方々にお声をかけることになったが、それができたのも、分野を越えた研究者が集う場としての JAMS ならではのことであろう。きわめて個人的な感想になるが、「華人新村は都市計画論的には理想的なコミュニティである」との指摘(泉田報告)は、筆者にとってはまったく考えてもみなかった新鮮な視点であった。

最後に、今回のセッションでは、研究大会進行の都合上、質疑応答の時間が取れなかった。長時間聴講してくださったフロアーの皆さんや、様々な議論を期待されておられたであろう報告者およびコメンテーターの方々にお詫びするとともに、司会役を務めた筆者の不手際をお許し願いたい。

(注) 文章中、報告題目の表記については、報告者による表記法にしたがっている。